

4. 手術室看護業務を考える

— 業務分析表を用いての 看護業務の整理及び改善 —

手術部

○ 小笠原 千 代 西 野 和 美
 中 平 郁 子 浜 田 東 子

I はじめに

高知医科大学が開院し、多忙なうちに1年が経過した。当手術部においても、昭和57年12月現在の手術件数は、2110例を数えている。又、増床に伴い、手術件数も増加の傾向をたどり、我々スタッフは、当手術部作成の看護手順を片手に業務を遂行しているが、未だに確立しておらず、日常の看護業務の改善の必要性を感じずる次第である。そこで、我々が実際行っている業務の問題点を見だし、改善をはかることにより、業務の円滑化、ひいては患者不在の看護から患者中心の看護へと結びつけることを目的とし、看護業務の実態調査を行ったので、ここに報告する。

II 調査方法

対象：当手術部スタッフ看護婦全員22名

期間：昭和57年12月13日～12月18日の6日間

方法：タイム・スタディ法により、5分間隔で自己記載した。記載内容の統一をはかるため、モデルを作成し、それを参考に記入した。（表1.を参照）

この集計にあたって業務内容分類表を作成し、調査結果を各項目別に分類した。（表2.を参照）

集計方法は、各勤務ごとの看護業務内容全体の業務量を100とした場合に、業務に従事した時間数の比率を示した。（表3.を参照）

表 1.

業 務 分 析 表

年 月 日

記録者

時	9	10
業務内容	手術(ル—ム)準備 申し送り 患者搬入 点滴介助 麻酔介助(挿管薬品) 導尿 体位固定(変換) ◎記録	術中看護 ・出血尿量測定 ・直接介助者へ ・麻酔介助
時	8 30	9 30
業務内容	手術(ル—ム)準備 11 11 30	回復室搬入 申し送り 後片づけ 食事 12 12 30 休憩
時	11 30	12 30
業務内容	手術準備 手洗い ◎	手術介助 14 14 30 15
時	13 30	14 30
業務内容	患者搬出手伝い 後片づけ 器械洗浄 16 16 30	器械室業務 ・器械片づけ ・器材の補充 ・器械 リネンセット組 カンファレンス 17 17 30
時	16 30	17 30

間 接 介 助 業 務

直 接 介 助 業 務

表 2.

業務内容、分類項目

- | | |
|--|--|
| <p>1. 直接介助</p> <p> 手術準備</p> <p> 手洗い</p> <p> 手術介助</p> <p> 器械後片付け</p> | <p> 器械の片付け，整理</p> |
| <p>2. 間接介助</p> <p> 手術準備</p> <p> 申し送り</p> <p> 患者移動，更衣</p> <p> 麻酔介助</p> <p> 体位変換及び固定</p> <p> 直接介助者への介助</p> <p> 記録</p> <p> 出血，尿量測定</p> <p> 標本整理，病理検体出し</p> <p> 医師呼び出し</p> <p> 環境整備(温度・湿度調節)</p> <p> 无影燈調節</p> <p> 患者清拭</p> <p> 回復室への申し送り</p> <p> ルーム後片付け</p> | <p>4. 医療材料の整備，補充</p> <p> ディスポ製品・糸・針</p> <p> 薬品等</p> <p>5. 回復室看護</p> <p> 回復室の整備</p> <p> 患者看護</p> <p> 記録，申し送り</p> <p>6. 環境管理</p> <p> ルーム清掃，整理</p> <p>7. その他</p> <p> 食事，休憩，私用</p> <p>8. 会議</p> <p>9. カンファレンス</p> <p>10. 伝票整理</p> <p> 管理日誌記載</p> <p> 手術伝票整理</p> <p> 薬品集計</p> |
| <p>3. 作業室業務</p> <p> 器械・リネンのセット組</p> <p> 衛生材料補充</p> <p> 物品の保守，点検</p> | |

表 3.

日勤業務従事時間数の比率(%)

	直接介助	間接介助	作業	作業室業務	医療材料整理	回復室看護	環境管理	休その他	会議	カンファレンス	伝票整理
13 (月)	21	20.5	24.3	6.1	15.6		11.7				1
14 (火)	31	34	9	1	13		10		2		
15 (水)	31	32	8	1	18		10				
16 (木)	32	36.7	8.6	0.4	13.2		9.1				
17 (金)	26	35	8	4	17		10				
18 (土)			20	37		19	13			11	

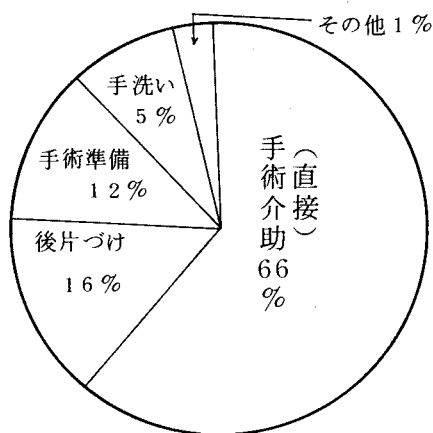
夜勤業務(6日間の平均値)従事時間数の比率(%)

J	3.3	17	32.6		35.8		11.3				
N		6	29.6		42.4		20				2

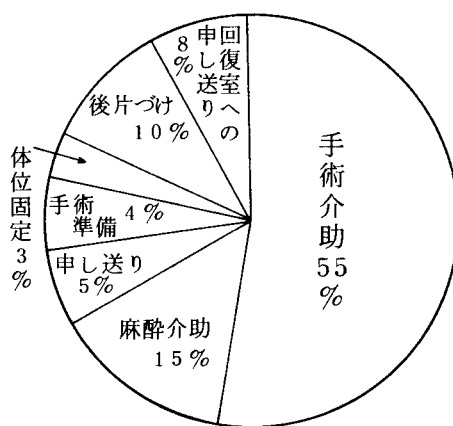
Ⅲ 調査結課

この結果、比率の大きい日勤時間帯における、直接及び間接介助従事時間数の比率を出してみた。直接介助で従事時間数の最も多いのが、手術介助で66%、次に後片づけ16%、つづいて手術準備12%、手洗い5%、その他1%であった。間接介助では、手術介助が55%、つづいて麻酔介助が15%、後片づけが10%、回復室への申し送り8%、病棟からの申し送り5%、手術準備4%、体位固定3%であった。(図1参照)

図1. 直接介助従事時間数の比率



間接介助従事時間数の比率



直接介助者への介助

- 〔薬品・糸を術野へ出す, 不足器械消毒, 不足物品(既滅菌物)出し, ガウンテクニック
- 出血, 尿量測定, 標本整理, 病理検体出し, 環境整備(温度, 湿度)
- 无影燈調節, 患者清拭, 記録

Ⅳ 考察

前述の資料により、手術室業務の大半を占める手術介助でも、直接介助者に比して間接介助者業務は複雑で、又、患者を任されているといっても過言ではない。そこで本稿では、この間接介助業務に焦点をあて検討した。

各自が記載した分析表から、間接介助業務をひろいあげると、手術の流れにそった画一的な業務以外では、直接介助者への介助項目が最も多くみうけられた。例えば、不足器械の消毒(ミニ・オートクレーブ使用)、不足物品の補充(既滅菌物、薬品等)、があげられた。これらが1つあるごとに、間接介助者は、使用

手術室外へ出なければならない。多い人では、1つの手術中に7～8回の出入りが記載されている。これは、必然的に患者サイドを離れることとなり、患者観察及びケアがおろそかになる。又、手術進行を妨げる因子となり、さらには、手術室内の塵埃数が増加し汚染の原因ともなり得る。

ここで、当手術室の平面図（図2.）により、ルーム7の場合、既滅菌室までの導線の長さがおわかりいただけと思う。我々は、この手術室設計を念頭に、少しでも有効に利用することを考え、使用手術室外へ出る時間及び作業導線を短縮するために、業務整理に着手した。

- (1) 術中、使用頻度の高い材料（縫合糸、輸液用の材料、輸液類やその他薬剤等）を選択し、各手術室の棚や引き出しに収納した。又、耳鼻科・眼科・脳外科・心臓外科といった特殊な手術材料を要する科については、使用手術室の多いルームに、定位置としておくことにした。
- (2) 常時既滅菌しておく物品を整理した。又、既滅菌室を整理し、特殊なものは、各診療科別の棚を設けて収納した。
- (3) 各科術式別の手術介助手順を作成し、手術器械セットについては、器械セットのリストに再検討を加えた。

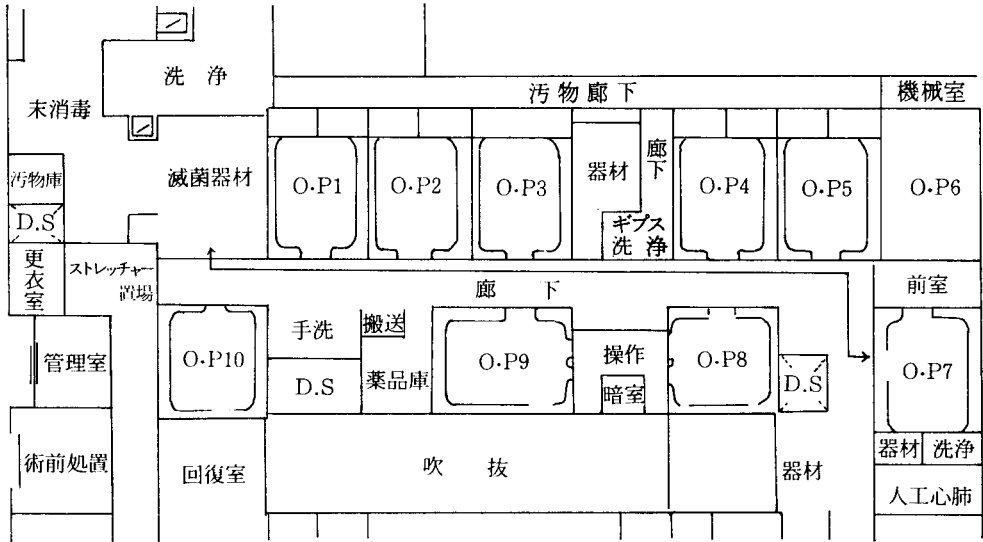
以上の実施により、以前に比較するとかなり廊下を走る姿がへったと思われるが、まだ解消されるまでには至っていない。

前述の三点にも、まだまだ改善されるべき問題を含んでいると考えられる。現在浮きあがってきているのが、材料補充の問題である。当初は、使用した材料は、手術終了時点で補充するようにしていた。しかし、手術増加に伴いその余裕がなくなってきたところである。現時点では、一週間に一回補充の日を決めて、主に土曜日に一括補充をしているが、室内収容量には限りがある為、週末ともなると不足物品が目立つようになり、ルーム外へ走ることになる。これからは、一週間に二回の補充をも考えていかなければならない。

手術器械については、手順及び器械セットリストの再検討で、かなり煮つまってきてはいるが、やはり医学の進歩に伴い、術式も微細ながらも変わりつつあることや、執刃する医師によりその手技も変わる為、これからも再検討を加えてい

かなければならないのは必須である。

図 2. 手術室平面図



以上、我々が実施した業務分析表より、気がついた間接介助業務の中で、患者サイドを離れる場合に焦点をあて、少しでも解消されるように検討を加えた。この体制で、再度業務分析をする必要があると思われる。

今回の分析表については、全員を対象に行ったのであるが、やはりその都度記録するのは不可能であった。又、五分間隔の記載では細かい動作が省略されることとなり、実際の動作がぼやけてしまうことがわかった。そこで、観察者をつけて、より正確な業務分析となるように次回の実施には考えたい。

V おわりに

このたびの看護業務の実態調査は、日頃我々が行っている業務内容をふり返るよい機会となった。手術室看護の確立が叫ばれている今日、器械出しの技術と共に、患者看護に目を向けようという傾向にある。我々ひとりひとりが、手術室看護婦としての自覚を持ち、もの言えぬ患者の代弁者として、業務を遂行する為、この調査を土台として、多々ある問題点を改善すべく、今後も努力したいと思う。

< 参考文献 >

1. 土屋健三郎：看護研究の方法とまとめ方。

- 医学書院，1979，第1版第17刷
2. 山路スミ・小川龍：中央手術室の看護。
ライフ・サイエンスセンター，1979.
 3. 田中恒男：看護活動調査の実際。
医学書院，1976，第1版等4刷
 4. 福井道枝：手術部看護業務の実態調査について。
第10回日本看護学会集録，教育管理分科会，日本看護協会出版会，1979.
 5. 松井幸子：中央手術部における看護業務分析。
第13回日本看護学会集録，看護管理，日本看護協会出版会，1982.